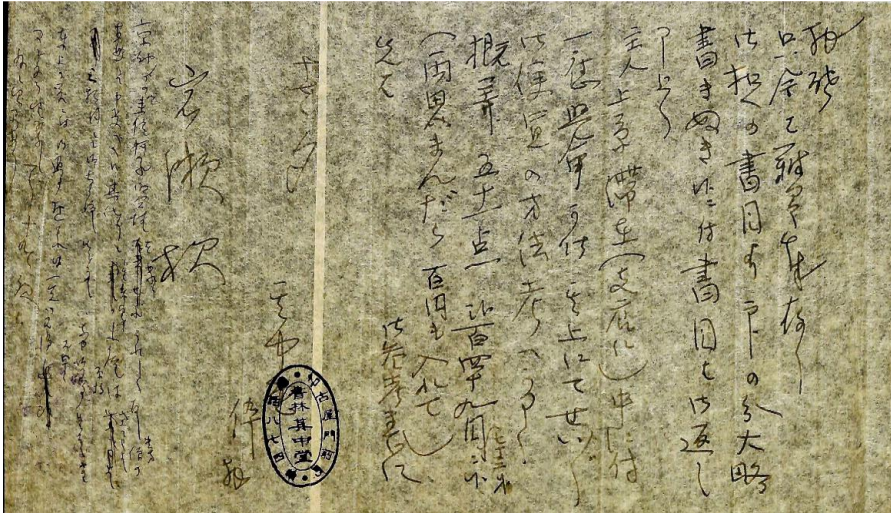




岩瀬弥助式古書購入法



塩村 耕（日本文学）

日本有数の古書の宝庫、西尾市岩瀬文庫の全資料調査をはじめて16年余、ようやく終盤にさしかかった。こんな巨大な文庫を拵えた岩瀬弥助（1867～1930）とはどんな人だったのか、そんなことがしきりに気になる昨今だ。つい最近、弥助に宛てた全国の古書店の手紙が17通出現した。

たとえば、これは名古屋門前町にあった大古書店、其中堂（現在は京都で盛業中）の「倅」の手紙。古書目録による弥助の注文について、「主人上京滞在（支店に）中に付、一応照会可仕候。其上にてせいぜい御便宜の方法考へ可申候」とある。これは、弥助よりの値引き交渉について、京都に出張中の主人に相談すると言っているのだ。弥助は厳しく値切るのが常で、しかも資金潤沢だから、資本主義の原理に従い、交渉は概ね弥助の勝利に帰した。三十代で幡豆郡随一の資産家となった弥助の冷徹な商人としての横顔が見える。こうやって一冊でも多くの古書を手に入れ、それを一般に公開し、それを通して古書の永久保存をはかった。それが岩瀬文庫である。

ところで、この手紙の余白には、珍しく弥助による返信文の覚えが記されている。それによれば、1月19日夜に「貴方仰の直段にて申受べく候。其代りに小生希望の米庵原稿は、兼て申上候三拾円にて御売渡し被下度候」などと返信している。「米庵原稿」とは明治40年1月発行の『其中堂販売書目』に見える「米庵墨談原稿」に相違なく、同年の書簡と判明する。『米庵墨談』自筆草稿本は文庫に現蔵する。他の購入品の値引きを手加減する代わりに、希望価格で入手したのだろう。このように個々の資料について弥助が執着を見せた事例は稀れで、われわれには嬉しい資料だ。

ところで、この手紙の余白には、珍しく弥助による返信文の覚えが記されている。それによれば、1月19日夜に「貴方仰の直段にて申受べく候。其代りに小生希望の米庵原稿は、兼て申上候三拾円にて御売渡し被下度候」などと返信している。「米庵原稿」とは明治40年1月発行の『其中堂販売書目』に見える「米庵墨談原稿」に相違なく、同年の書簡と判明する。『米庵墨談』自筆草稿本は文庫に現蔵する。他の購入品の値引きを手加減する代わりに、希望価格で入手したのだろう。このように個々の資料について弥助が執着を見せた事例は稀れで、われわれには嬉しい資料だ。

学生たちの研究生活—File34

時間とは何でしょう

研究室名：哲学研究室

時間とは何でしょうか。その答えを見つけるために、あなたの生活の一日を考えてみたらどうでしょう。

例えば、あなたの一日は、朝起き、朝ごはんを食べ、学校に行き、授業を受け、遊び、夕方には家に帰って来る。そして、夕飯を食べ、授業の予習をし、お風呂に入って寝る、としましょう。このように、人間は24時間を一つの周期として、生活を行っています。例えば、何時から何時の間に食事をする、何時から何時の間に学校に行く、何時から何時の間に勉強する、何時から何時の間に寝るなど、それぞれ、ある決まった、しかも限られた時間にやっています。

いわば、時間とは限られたものであり、わたしたちは限られた時間の中でやるべきことをやらなければなりません。そのためには計画を立て、上手に時間の配分を行う必要があります。このようにわたし



たちは時間を一種の限られたもの（例えば、資源やお金などと同様に）、あるいは量ることができるもの（例えば、長さ、量などと同様に）として比喩的に理解していることが分かります。

このような言葉の現象を、最近の言語研究の一派である「認知言語学」では、「概念メタファー」（隠喩）と言い、人が「時間」を概念的に捉える際には、メタファーを使うと考えています。メタファー（隠喩）とは喩えの一種であり、最初に分析したのがアリストテレスという古代ギリシアの哲学者です。メタファー、つまり隠喩には、「時間は金である」とか、「人生は旅だ」などがあります。

しかし、「時間が限られている」とか、「時間は絶えず流れている」とか、といった時間に関する言語表現が、メタファーであると気づくことは難しいのです。なぜならば、それはわたしたちの思考の中で深く根を下ろしているからであり、あまりにも慣れ親しまれているからです。しかし、それだからこそそのような時間のメタファーを研究することは大変楽しいことでもあります。

[香 春（博士後期課程3年）]

学生たちの研究生活—File35

外国文学を研究する

研究室名：フランス文学第1研究室

研究とは、あるテーマを定めそれを深く追求することです。その中でも「外国文学の研究」とは一体どのようなものでしょうか。

外国文学の研究には、対象の言語を理解できる以上のことが要求されます。取り扱う作家の生きた時代背景（歴史・文化・生活）、その作品が書かれた背景（理由・経緯）、さらに作家が影響を受けたり与えたりしたもの（人物・思想）等々、幅広い視野が必要です。

私の専門は、ラ・フォンテーヌという17世紀のフランス作家で、特に彼の代表作『寓話』の研究です。この作品の大部分は古代ギリシアの『イソップ寓話』をもとに書き上げられました。そのため、ラ・フォンテーヌを研究するにはイソップに関する知識が欠かせません。

また、ラ・フォンテーヌの生きた時代は、太陽王ルイ14世の絶対王政の絶頂期でした。ヴェルサイユ宮殿を建設し多くの侵略戦争を行ったルイ14世を、ラ・フォンテーヌは『寓話』の中で何度も取り上げました。私の研究にはルイ14世に関する歴史的な知識も要求されます。

さらに、『寓話』は後世にも大きな影響を与えています。18世紀にはジャン・ジャック・ルソーがコメントを発表していますし、現代のフランスでも小学生の学習教材に採用されています。日本でも、夏目漱石が小説の中でその一節に言及しています。

このように、「外国文学を研究する」とは、単に作品の内容を追うだけではなく、その作品が書かれた時代背景や経緯などを踏まえて物語を追究していくことです。作家が作品を書くには理由があります。その理由から生まれる、作家が物語にちりばめた、あるいは後の読者が読み取った謎を追究していくことが、文学研究なのです。 [伊奈 友梨子（博士前期課程2年）]



最近の文学部

世界的な異常気象？

9月は各地で台風の被害が集中しました。『月刊』の編集作業の合間に滞在中のパリでは、月の前半は記録的猛暑だったとか。今ではすっかり秋の気配、学年度の始めの緊張感が街にも漂っています。(YK 記)